明星抄

若菜上

十三

若葉上

朱雀院のみかど

ひとはさらぬ物なれど源氏へうつる事をなげ
き給ひけり朱雀院(シユシヤクイン)の又十乃位
なりしの事なれどもせばへらるゝ事なり物ゝ
ゝ乃ゝとせらるゝ事なりとて美
物の書籍(シヤク)なりしかばよんでなぐさ
み給ひけるまゝにもありぬべき
よ源氏へうつるまゝにおりたちて
書もある物なれば別世代とて物
語のうつりかはりとてうつり

海より後深草院の御法華堂をこの所にうつしたてまつる
事を益々仏法の為に真実の心を深く九
月のなかばより御ぐしをそり給ひ
四十の年出家事并びに中宮懐妊事。
四十一月三月中宮御産の事ならびに
月の事あるべきなり
ありしかばみかど　六条院へ御幸ありて
幾ばくの後　弘徽殿の大臣ほう崩
ぎょの事おのおのまことをよみこどもを
なり春ふりて乃ち
行幸のあるべきよ　ひるの事

みこうちの長女を　生前院の御方のあり
なりぬるよりて今
冷泉院なり　乃ち御事なるべきなり
後嵯峨と　為雲乃女院の御妹なるべきなり
なぐ兄弟なり
あり死後よも　りっこう御をもるべき人なれども
さもなく死ぬべきなり　ぞう御して業前院の御代
よりなる御なるべきこと
ちなるなる人なるを御とりなれ
御なりしかば人をこと御なるべ
御なりしかば人をこと御なるべ

はんのうちよりとれり　　業苧院の法印

よりてれりこれとあるり

みゝ山まする　仁和寺のうちに物よみくらも

きる法りたてゝ　一切仏ち出ることあり

女法花も　業子殿乃女法ひぎ髪のいとと

はうし法こ　女法華のまりるりゆゝ仲業

ぐきまこだ物り

ぐ花より根　業苧院法りる

ゆゝ法る法　法花よりはこ法ぐ法

こゝまんる　法花よりあるよ法こるり

ふゝりゝこきこ法よ　業　花る形ひもこ花

よゝをの法ゆくこくぐゝゝゝ法ゝ業

とゝゆゝゝゝひゝひくゝゝゝゝゝゝ法ゝ業

女法りも　業子殿乃

こきこと女法　ぐ業子殿乃女法こ華乃

女法乃竈よりをゝ　ひゝ人今

まこだ物まくこくこもこ乃こゝゝりこれ

法ゆゝ法物をゆゝよゝ花の法花こり

法花こここ法法ゝまこと　迦法こ法ここひ

まゝゝ人今業こり

苧院のゝ人乃　業苧院乃法祖こり

この院乃法事　法こり

今のうちの法事　法泉院さま
さうさる死事の　法子の左遷の事
義文さるべく　ゆゑの修法まいらせられる
此秋の彩雲　後嵯峨院の御事
月さるべきこと也　秋と書始む傳やり此歌
よもあり
さうたりよきん　さもさうの夢の也　一向
幼少の時の事の様　知らぬ様とさるる
年頃さる　夕夢の事　のびしの事
大納言
いかへのうきこと　夢

おのれさうの様さ事

のあやまりよんなんとさるべ
しと言さる
古院の法ゆいうんの事
法師よれさうまし
かうさしるべ
さるべ様さしよ　教化の様さ
夢事その様とさる
今かく教をさうさて
さ時のさんの彩雲　今月
まさる
様子の色ゆさうの彩
夕夢今年十九

なるり

[illegible]の海つるより　業苧院の沿

[illegible]雲井殿より伝付ける事なり

[illegible]　女三宮乃降し給ふより

もとゝ[illegible]なるり

[illegible]　[illegible]の沿

[illegible]　六条院[illegible]より

[illegible]　六条院なるより[illegible]の事を始めて

業苧院乃の[illegible]なるり

[illegible]　[illegible]を[illegible]一りして参議（サンギ）より[illegible]人

つゞ[illegible]を[illegible]（セウジン）寝をするとも早

[illegible]

[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　女三宮なるより

[illegible]　業上形り

中納言[illegible]　[illegible]乃[illegible]の沿なり

[illegible]　雲井殿乃なるり

[illegible]の院より　六条院なるより

[illegible]なる[illegible]　業上乃形より[illegible]

[illegible]を求め[illegible]乃なるより

お[illegible]院　[illegible]なるり

かまき叶せうせ
ひまき女なりしも　女ハそおとしかなりしハ
源よりておさむる人しとなり　其よりハ光なり
此君乃問ようん乃子の事も
左中弁　柔蔵乃弟の人なり
うへなん志らく　めのとも左中弁なり猶源
さるなり
かの院よ　六条院なり
弁いふ彩ぞ曽祖　左中弁乃弟なり
御んともなく松ひしかるか　紫上のうへ也
そまきよりてかひなけれるをまる　葉上

よふわさしかみる親ずそ活ある甲斐(カヒ)
あちう紀とあり　月絵流かこくのかひなか
流せくせおわて
尖まちりて海りしてきいうしと彩り
親いうしともかい親く　さ海く忠棄して
親気うしと忠人か西日猪なり
さるれこの世のさく人　源の月様なりぞ九方
上よ不足なる事かなる紀をや於太監の志つの
しとなる紀乃不足なるも親り無上
色人かうるよきまさとも志てさしくり
むく人のつるなり妻よりておしかれ

かくしよ浦をて　あこ多をまこと浦
千分をしさるるあぐんとをり
そをまこよれをるくい　安こ爻る仙つうう
爻事しと云う形り
狂くよ浦をて　乳母の羽をるぐんさん
まくしの多うをうよいくしとをり
今の老乃御こて　上方の事い濃素よ
て大御こてまこ浦をもこ乳事をる
を今の老こ仏事よを生てをんと
ら新しをまでいと面付乃をるひを
ふ一ぶ爻こ仏事しあまこよ大やう

よまこ浦をこと爻るのと
大かくし乃浦んをこさてよ　上乃をこさてよ
をくぐんをるまこをるり
をこをひるよ　朱舟流乃作をる
いりてゆをを　こを乃事をり爻をと
ゆせぐこくい面事こ形り
をへくあくをもくも　若をよ浦をこく
親の元めくる事こを乃答をものぐる
ゆ事こ形を
形やしをこ世仏

言鑽穴隙相窺踰牆相從則父母國人　孟子曰不待父母命媒妁

皆賤(ズ)之(ヲ)

みなしのかのもちてまでく　名なる衆(ガイ)

唯(ユイ)一心不(ゲ)生則流の種となく

すやしくもちらわさ　女三宮乃流事なり

こまごかまご乃ふよ流らせく　乳母なちのふよ

流らまんぺしれともり

いよくまうりく　乳母乃ふなる

ふう紀母いも　流病(ヤイ)おの紀よまりく佛法

流(ニュ)行(ギャウ)も深乾しかで紀ともりま

あまるく把せしる人皆　あしくのあうら紙も走了

おて良よし給へさふなるり

名録之文　第乃文なり　あまるまよより紀乃の

あまりいてなまたひ

あるなしなり

大納言のあそん　菜第乃みなり紀ばくさい

女三宮乃勅制出国をたのぞむ事をと云つま

あともかくやし　源氏大臣延喜帝乃流む

とまめ乃事柳よ引つま

右衛門督　柏木なり

内侍乃うき　六条なり大政大臣の宮のひ内侍

のうき乃兄弟なり

あゆきこのわ　二条大后乃流むすめなり

老ぬる女　玉鬘をなほ頼みて見出さむとも
さきおもさうをいへり
権中納言　夕霧なり
女三宮乃　雲井か事なり
後の世の　後代乃事となり
此女乃流事　六条院よりかくまで御反故ぞ
いくまも立をくまじ　朱雀院の源氏より三条
乃兄ともいふとなり
そまつるの朱雀　御弟子くらいかにもて我(マジ)
乃ちびりの心や朱雀の世のなれとて
職の　朱　朱雀のさためまいらする事明

よめる後徳(カナ)乃ねうくかゆよりきさる事
意乃事なり
思はぬよしてなり給ひ　入内(ジュダイ)御後となりまさ
御かの方に給ひの人　こよなくありさる
人ごとにまかの寵乃ある事よあるに給ひにとや
ころみよとかくいまさとくかすをもなり
古院乃御時　先蹤(セウ)を引給へり弘徽殿乃大
后の藤壺の寵をねたしまつる事
なり
ゆるなき　威勢(イセイ)ありてかしこきなり
かの源氏の御せうく　女三宮の母と藤壺女御

姉形の事なるり

うちもさ　友達よりきてうたひ女こ
文乃ほかうちもたやくあつまるゝ海も家
数をひろひしるりぞまこだひ形をとゝ源い
ゆくゝ形りひ形をまゝ形り
年もくまゝ　十二月よりる我いへつま紫蓋に
さあらひ眞よ年も海りあと書ゆりて
年乃くまゝうみゝあり
加へ夜　相渠夜朱薩院よあり
り海ゝ乃ほのゝ海ゝり　朱五子　周礼を乃六形あ
つと茶ゝひみゝら

ゆまこ二ほ　乃ほ乃ほ乃天倉ほり
加乃むゝの　舟を文ほよゝ形ひゝ時乃事形り
文のうん乃ゝを　中を猪熊や
加形事て　地へゝ世やゝる今ゝ事ゝ形り
さゝ形ゝ　さゝるゝ乃ゝ形ゝるゝ猪よ
孫あゝて前日ゝまゝゝ文ゝ形ゝ交ゝゝ
とるゝ形さびよりゝ入へゝゝ形り早下ゝ
ふなり
地へ地　ものゝ形り猪を中文ゝふゝの
人ゝまゝて形り
苔の表を　大猪夜りての事ゝるりゝとるい

総て云乃事ぐさなり
さし次さま　中宮乃さし次よ此女三乃宮をとゝろ
りのゝもぐねとなり
まねしき総乃人のよ　中宮乃人々へとなり
次いむ事　受戒乃阿闍梨なり
村さき死変　女三宮なり
次うしなり　源乃事なり労事をとて紀禄
総なり
まくしかぬ次車　まづの檳榔毛乃車なり
無し殿の車まで　さて中宮より出来ゐりの迄
ふり総へり　次萬歸乃さ渡なり

古院よ　源乃か総へり調
これらの　出家乃ゝ総ぶしの事なり
今日乃あさなぶ　院乃次かゝ事
ふさしもかなゝ　今次寸ゝ孔志とし総か
朱次気力もなししかり
しめ次ふさし　かく念彌なすさへとさゝ総さ
し乃気ようをとぐむうしかり
次ふ乃内よも　源乃心の中なり
しめ人もわも　源の羽総を
女乃次とめ　次事も去女乃次心のよく似へ
まきこと女の次乃あくるに次心の係りよかゝく

かゝる事もあるべしと思ひ
給へて　院の御所に行てよろこ
しき事
さうもんのこと　院の御所にまゐる
いかゝ御所のあめしと　摂籙大臣の御所にも
仁王会の事
御ものがたり　院の早くその御ものがたりぞ
あるべき事なれば
もとおぼしめしたりけるまゝにいかゝ
ものがたりの中にあるべし
中納言のあるべし　西日記にあり
源の親あり

源氏物語　卷元四　十二

源氏物語　卷元四　十一

物語にかゝれて源の中将の
もとにまゐりあり
れば源氏をよ　物語をもとにうつる
事もあるべし
もとゞかの御方さまをもとめあるべし
せんぐう　洗宮の方を尋ねあり
源氏　源氏の御方に行て琴を弾
あり
琴弾る　まゐる花たち
あるべきこと　源氏思ひよりて給へる
事いかゝあり

さてもあらし山の秋院　光源院流

なをも命はよそしなへさしもれたるうす事の家

成るつまをもとれるへきあらしかるる

おりよんもすくて　光源院さまの御

たさこめ給つさうん　光源院とのよんの給たこうこめ

給へうるるつやうの事の出来あるう

よ清きてうこ一入大切よをへさうれう

今の年はと　延年とるりてうを飛ばもも

るれうれう

その歌うる　朱雀流うう海給和るう

院乃御りいるる　源乃御るう

かへうひやうて

あらうるれうや　光源院とうるひ給へうこうれう

乃清あしう　如三宮事とうれ　光源院とうこう

うれうれうとうひ事とうれ　光源院とうこう

給たる乳事とうれ　嫡流乃まうる源うこう人

しるう

ゆるつまこるて　久ようる出一給いうるれう

家るう　光源院の御るう

めうまうくうてうるうと　光源院とうれまうて

うる紙もんぐるもと　光源院とうれまうて

めうへうこうる

かの母女院　崇徳の御母なるひさまさて他人めく
なるなりけり
あまのかる　源の朝
人のとしつもの　人中云を云とゝへつゝ
海士のとをひきり　くゝ毫紙ぐら
ふひとりよりあひて
をんななりけり
ふるのゆも　崇徳院御中なり
あふよりとうはひ　源なりとゝへこまよ
てもしらなり
なをしらぬのいとり　源の清方ゝ崇

拾遺集　巻第十四

拾遺集にをんなの
ひるなる海松ばみ　源清
をゝ拾遺の天徳人の
歌合の　崇徳の後母女院
歌合の　崇徳の後母女院
乃姫宮の祖母なり
たいとうなる　いかるの人のとゝもあるれ
のゝをあるなるなる花なり
今ゝさしもとのゝ　崇徳の今はなり
なて双ぶるくみ　しのがゝのゝ
東あるハ元列盛　元必要乃姫あるれ
年もゝへつまね　源宮十年なり

中宮御方　宴会の記　源氏十帖

さるべきこと

霜月

左大将殿の御方　主殿司の所の蔵人

を男所事　言葉の事　言葉の事

言葉のよ　出くるみつぼ　ものよ　言ふ

つまの方の御例なり

為ひ事　面付　言葉　言葉の所

めの左大将の御方　ものの事

めさるり　ものの事　ものの事

為の御方　六条院の母屋なり

いくさのこと　ひ所　所より　ものの奥

為の方　御所　侍　三光院自筆書入　奥

ものの所　鹿苑寺　御所

所の所　所十の所　ものの所

女房　所　云つて

かつて　ものの所　ものの所

かつて　所の所　ものの所

女房　所

三光院自筆書入

所の所　ものの所

所ひ　ものの所

所ひ　ものの所

義経記

おなじくは　かゝる　よろこび　なほ　なし　なほ　治りんとて　先問まて
　　おなじくは　対面する　なり
ひらかなを　入　源乃　五郎　涙の　うるおひ　なる　紙
　　入　つ
おなじ　なる　死　ものを　なほ　義乃　上　差　ものを　義　なし
　　角
かんの　ものを　うら　清　きて　も　なほ　義乃　ふ　よい
　　ふ　上　差　源　よ　ろこ　せ　や　まず　義　よ
　　ひ　ば　し　る　り
　　る　よ　ひ　し　源　乃　網

加藤　ものを　ふ　ふ　源　孫　生　る　り
　　ふ　し　に　ものを　なる　り
　　人　ら　と　よ　ふ　ふ　ものを　第　一　ふ　し　ふ　へ　ら　ま
　　ら　ものを　ふ　ふ　ふ　生　ら　引　ふ　ま　て　ものを　て　ものを　年
　　を　ば　ら　る　り
せめて　ば　と　る　ひ　せめて　て　ものを　ふ　ふ　く　乃　ふ　ば　ま
　　源　氏　ま　ま　づ　ま　て　ば　と　ま　る　く　云　る　ば　ふ　ま
さ　海　ま　ら　り　歯（ヨワイ）　ま　る　り　ば　義　乃　気（ケシキ）　ば　る　り
小　ば　ふ　ま　ものを　ふ　ば　人　乃　齢（ヨワイ）　り　ひ　ら　ま　て　ものを　ふ　乃
　　も　ま　る　ば　ふ　ま　つ　へ　て　と　る　り
武　ま　ま　て　槙（マキ）　ば　乃　ば　文　義　る　り　ものを　て　ら　乃　ふ

をなげて大ねの方へ
逢来しに行へ
はしまりこと
乃孫にあらず
こもの　獻物　竈物あり
おりびつり
おりんつさ
はつえ　　簀の縁（クマシ）
おりこと　ところ
さるる
まつり　和うわ　藝（イキヤウ）はさすこのぼう
大ねの乃ほ
逢来
乃
ある物も文
とまる
はしもい
きこうんざ
若乃今文
宣陽殿　方丈樂（ガク）
新
右院　桐壺帝
一ふの文　朱雀院乃
はつ
一ふの文
こ

加へて色よ　呂(リヨ)の律(リツ)なる物
を御あるひ御祈祷の事　此御
堂も為めに御日々祭を為
を所為よりわれて堂の内のみこだれ
ひとりこと　公義の事御ひとりてこそ
波沢(ホウシン)　沢山なるわどもそれ私事なるこだ事く
とへく一所と結構(ケツカウ)御へうなる
かく色とはう　源の朝
年月の物語も　かぐへたうんなるせた
いつよりの苦の松なや年を経まし
くらぐへたうせ御ひまるよ

世よとこそ　大内の事よりこうと御事源
乃頼(ライ)愚ぐ物なる
さ所く秀千日よ　とをうまりと御なる
内よ海いり　入内乃義をまりびなる
きいのそこ　夜大納言なる
御車よ世さり　御下乃礼をこ(ミヅカラ)車とよなる
なり尽源を院号かうり御へでさそこと
海ぐこ紙ぐ文なる源乃猛(タケ)遠乃祭なり
こうへ今の松をまこと　なる花なる内まいり
あくも物
もこうれ御こ　僧なる乃ひなる

いとゝ思ひかなしく　思ふに源の大さうこゝろ
あるまじきをしらるる　嬢女ごの事
たゞまう成と思ひ
年ごろもなる　思ふ人なり
思ひそめて　思ふ
なりて　男の心の中なる思ひをさ
しるべき事　源の
一ぢうこゝろ人も
とおもひ
心よりて　あんよりうさ
中納言ない　メ男ども
あんもうまりとこ
みもなるまりとあんよりの死ぬ
こゝろ計を　源の思ふ人中納言
をもつ思ふて　思ふ
うれしう思ふ　えもう後の
えぬうんう男ども
きとあるなをもう
祝ぬ引よせて　思ふ
めよをく　えもあるさ
命ちう　此二人の
おりてなるさと
とうも　源なり

年始さもやあらん　忠臣の心ある種族流る
との事なり
今年始を　世の人あるいは事
を出家の人家とする
嘉を言らん　忠臣なるあるなさま紙作
つまり行ふなり
かの人の人あるいは　忠臣なるあ
くられさ　忠臣の羽や
ひと家族をとらさ波　仏事を人とり
とる事なるまこだ物も忠臣より勤してた
ふ物の人の事をなるさ事をなるさ物なる

苦度あるなる　忠中勢中物忠なるわたで
めるる源の源の人なり
風うふるる　雑(ヨカン)を乃時なるる
かの源義よ　源の義なるる
秋乃なるさも　乃なるなる波
を始なる　樂天(ラクテン)　樂天(ラクテン)　樂天(ラクテン)
御こるあやなるとと　さるる波人乃事明
移始なる事を　樂天(ラクテン)　樂天(ラクテン)　樂天(ラクテン)
者　文藝とる和　文藝とる和
なる酒し始なる　忠臣の人なる
ひさう　秋なる　忠臣なるなるなる

鬼神紙しぼり　源をこうもんあるもの
みよるく久しかりける　源の狩るもそをも
せ事なるり
おもしろゆるこしこ　女こうそう藤姓(ジヤウ)文下并
かさりとる死人を　狩の男をいたる死なり
一ちりさきど忘と狩の男をいたる死なり
ちんでんよりも　女この所あるり
をさりを　文乃羽
さやうえを　文よりあるで羽めくらへるや
しとるる事かの　源のん
女ちも　忘とるり

をさりをきこの乃ゆり　文日見るへ
おとにさりをもる死　人がらを飛(ヒツ)
狩れよりの羽　狩へつま
白さ紙　ちくしきまるり
うりをを　さうへうる狩ゆるりるるぞ
きたるり
ゆりくこ出て　狩とれ忘とりたのび
狩ゆり
ゆをゆさり　文をゆをを狩ゆをりたる
ゆるへ
神ちりへ

打ぬきたる
若紙やうなる物にかいたる
なり
物をすこし狂ふる　心
はしりたる物をも
かいまぜて狂ふるやうに入たる
なり
物を洗ひ
物よりして　花枝一茎にて
乃上に洗して
すぐれたる面白ぶ文
茂たるかやうの花
なりとぞ云ふ

たるものなり
あれもあまり　此ごろあらんも
ぶこたるもの
をすぐさめんとて
花なり乃義世義益なり
ぶこへまあり　如三文字ぶ事なり
ぶ乃ぶ花を　如三文字乃ぶ花を幼稚(ヨウチ)
を思ふ馬鹿(バカ)
なるなり
みな働なり　思ふ乃用を形り
いとなんして　あやまりの事なり

気やかくやとのゝの簾こそのどか也
あくるやさくらとし
ふみやようちもを隔し　添乃浦形(カタチ)なり
今かんもまつ　三秋や不殺後る昼(ヒル)姫くみ待つ
人こなり
咲やこの酒ことは逢ひと知らう　某上猶乃流
折ばしらくは夜よるてもし湯と逢ら添
秋り
ちこ乃松もこうしひ　咲ときあきこと波なり
松いうたて　大猫なり洒説雨卯花なり
えんきすてうに　蕨(ワラビ)がちなり

前乃谷すらの海し　添乃きこ河のふもとのほそ
すらがゆるひも志務へとしかり
よそ乃花ひと　今は文語がけるまかきいは
魚(ヨツ)しの花ひ盛りいゝあしらるゝしとゝ
さし来らひ　其上をは大家よくそぶそとの
あそとなり
月のうちは　二月中あらわに利るりしうつり
絡なり
いろあさく雨や秋や　二秋く人乃光あらんなど
松のうしと深黒絡らぐ気色も角もあるへ
となり

於こなた人の　院の御文乃絹
ゐ給はぬ給へさ　よそ御乃人ゝしくろくまう波
さげるとあり女二宮御母さへ思ひ乃御をと
おもてまをもなり
そむきなり　はせうよりせうめなり
ゐみしか紙乃へく　懐(オモヒ)をあまたがきなり
そむきせ乃　はせとあまた御心あらかなりく
かけもてまい給そへなり
いぬかたし事をせ乃さまた死
乃事　御子乃うつろひ
昔乃中納言乃事　若君源氏乃心しかましく

しめたに人なり
哀とおもふ事　御山おりまし乃事なり
紅乃をりんとう　引出物ましまことも人つかいは
いひとし
はらかなるとゆるりのこ紙付へ事ならなり
論語乃　肴不(ニカヘリミテス)嫌(ヤヽシレカラ)　弘徽殿乃大后ゆかりまき
はあへまゐかもし
せよゐめにあり物しまとおもき
志のゝ乃ある　御かたきまさしえへある
おかしくも　勝月秋乃絹
猶そのうひ　御山ころの御ひ(トフラ)なり

さるまたよ　源乃人まる　勝月秋ちとろく
しまさ海まる
みとろやうの　源乃人
むりしあるよ　風乃池のむ藻ま掛ふ
鳴を驚ヨレ　書うへ面白し
年仲　そうたよあしとへつま
年月を　ひ藻ヒヤウゴ　おぼうしもうの月と
ろ海ちう
ちまうと　あうちうとは源うう
藻ち落ちうと　なるとうり
ごう藻よ　勝月秋乃ふあう

さるかうまくも　中納言源乃人ふるう勝月
秋ろ源乃人まくう海うくうもみうう
ざうりのをあるう
ろ乃　太郎ふ事まう
海うくうう　物見ふへつま
ちつまうも　昔乃事もうよ長まこざれた
とうう源乃ふあう
藻ふ法ろ　勝月秋乃ふ源ふうりを
しまう

月をるをん　源乃月をるぎんと海う紙
掛るふうう藻ヒ藻ヒ月をるぐ面ろさ海ちうが

波乃うらなみいとふまで来よりまでの
業事なるまとて波もうをじと寄るを
ふるうらも　年（タガイ）おゆるさぬ事と知り
そ乃うちも人よりは　なまよの花なり
ゆうつくしきのひ入　源乃法さと知りを
女ぞさきたるり　ぞとこいた大ま推量志給へる也
みりもとへ変　ぞとこへ変り給へる
うらもひて　ぞとこるり
中そら知る　乗よ角うち乗角の中宮
よて成とるり
かうん角とうね　源乃河なり

桐壺乃巻ぞ　ゆふ姫ぞ知るり　朱十二なる
御ぞ乃ぞ乃ぞ　ぞとこて源乃御地
人ぞ年のぞ法　到（ヒ）るよ及ぞざる知り
めうう業　ぞ接紙なり
如三文乃ようう海とあ
紙文乃れり海と
射（タイ）のひんうるり
ゆうう乃法　実（ジツボ）乃法さのうるり
姫ぞよも　如三文よ　ぞとこはいぐよ射面
ゆうへうう知り
うらぞて　源なり
文ようも　ぞとこ乃ふるりゆふこをもづ

く心ばせなり

あいよ行う人　源女こうえん乃法師事なり

ものいさ　相違形なるも

ちづくうちうち

人乃いとへもまことに法ひくこうち　源の河

なるりん人の行事をうちうえべきなれども世者と

て道てうをうへがう死事となり

行心もなる死　源のこいなるり女こうえ乃行心も

なるさ法なれぱうこ世乃ひとり人和行へさ事乃

ちづくうち形なり

さの行りんを　ものこ世ひうちての行なれ

かへさいの行へうなれりぐと世乃ひなり

ものちうこの　ものこうちうえ乃ひとあ世

ものちをこ法なりとひ行ことなり

ものの乃行のちうさなれ　ものさく世

姑娶乃美なれをひ指しとなり

をのつうこうちもあ形もり変　怨者其

妙娶乃心なり

女法乃名　女法れ乃ものくうりて変用

うりうちぱこうぱ行ぬぐひるくうえ

行へこいう井乃ちなれうんとなり

ものちく　ものちの人世秋より遠ものゆ世

つまぢぶの山のかすみ
の深ゐ　もあり　山ぶ
を数なきへ　ぶ
あるの　源さねの
も　文字面白　山
うりるの事　どぶ　の
なぎの下ぶ　思ふ
の事　思ふ
こひ　思ふ
まだ

かの志のびかよ　勝月秋なり
いとゐまもる　ふりさけみれど
もるりぶ　ゐ
まぶ　ゐ　ゐ
花ぶ　ゐ
ちの　ゐ
ひ　ゐ
ざる　ゐ
いと　ゐ
昔の　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

中納言乃めのとを　如三の御乳母ちう
おなしかたらひを　御親戚乃ゆゑなり
しめすり　乳母乃羽ぶるつぼめのり　光流
かぎとりて母女御朱雀院ちう
そむきたまひ　朱雀院もかくの御心しと
いとかなしきをなりて　皇子乃羽ぶるう
老中乃人をあいなう　なりて嫉妬乃心を
必ある老中乃おるまを
こと乃ありて　老ちたさ海くの事いひ
しをきて前面乃後ちて事をなすまを
ふとるう

さうの御ぞう　源乃三位堂ちう御ぞう乃事
あり
ひつじ　年満ちう正月廿二日ちう
御ぞうあり源乃御方ちうまてる和あり
日たちて　ひ延生日なりけるう
式院ちう　六条院ちう御わかれ
御ぞうあり　御ぞう乃後ちて
御ぞう　乃事あり
御かたちも　光ちう星なる御ぞう
ものいとも　当宮をもちひくかざり
なるう

うちのいと　杉ひのきをはじめとしてうへ
かすのうちのいと　おのおのもあらそひ分くこと
いたり　例　花ちるよみこゝあり
ちきのいと　桐桑ちるあり
沙羅　はしのうち又ちるあり
せんたいぶん　あんをとる処乃擅ダ　一本
あんをとるをなかありとも也　義
はなとをすこと　はなの毛源を中
初敢仕たるを以中わかぶとをこと分
がつ皮を事のかすすこゝあり
かすをん　はしの紙わと云へ　ノシドコロ　ぶつ家

月　語葉上巻四　三十

はしの紙補とするのをまことなるまこと源
を今流号を夢ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
じつ紙源の通也　思あて改としてあり
義なり
夫人乃文　落書なるあり
右文乃　落書形なり
中文　杉なるあり
あらかの紙源をこと　中文乃法の中へ
文文物文をかの　二親の法をこるあり
会なる紙と源をあり　知源を法
可なるあり

かうあるうちよ　行事も省略(セイリヤク)あるべき歟也
を源ちやう殿へ
めをかるべしとあり　源のいちやうやうよ
空十乃雲といふ事也
まこと石清水を尊と云ふ歟ようく
云ちとさめ給たるまつの歟(イカカ)長さ例もあれど
ちんぜ(ダン)ぶりつけくくのまへいまはつり
ちんしあり
大御をさ殿　云事なるまじきなり
おりゝ殿と　六条殿乃伸(ヒンヂル)乃断なるまて
さるべくよとしようしん　おまへ殿ゆゑ殿ゆゑ殿

乃おとし
ちくぜと　兼くくるゑん(カクシン)乃緑(ロク)だちなり
ゑよりちゆうゑ乃なまさぜ
ゑ乃なりなり
ちゆうゑ乃文ゑなるまて
ちおお殿　中ゑ乃文ゑなるまて
ちゑ殿の一乃(千)殿
ゑ乃殿なるまて　ゑ乃殿なるまて
殿よりちゆうしてゑ　上(シヤウ)よりの殿ゑ
ちたちうまし事を殿乃ゑよりゑ
しあるゑ事なり
中殿云よりつを殿なり　用ちし殿へ殿乃

おしく後へ來よおもぶきたる人多しに
ゆづり給へつ給ひ
右大将　素晶よおし
この中納言　大将君闕(ケツ)あるより望く人多し
ぞ大将のみとおぼえたまひ
うしろ見し君所　蔵ちる皇の御方ゆかり
あくのうやし　内裏(ダイリ)よりし給へおはれ給ひ
御中納せんしきを給ひて　薨人に君なき御方
おかり
左大の臣なし
家上人今ここの内まいる文院のこれらききく

おし　花見るよみてまいらせ
今日こそおほせらるのありて　内よりの御使あり
うちの御て　宸(シン)筆(ヒツ)を染(ソメ)給へる歌之
かくのあやれらきとるめん　屏風のおりてあらり
御かる百十之　よりも給ひける御あるたけ別花る
よみくるゆら
六衛(ロクヱウ)府
まんさいらく　此外よ楽(ガク)数多あるべしされ
ど縁あるちらをおきて書給ふるに
京まるこまろうまひらく　舞をあるして御お
乃御遊(ギヨユウ)りしおまつる給ひ

あくのさうのなり　ほなかるべし

問云文一流　一院ゝ来薩流ゝ云ひ伝ゝ

源氏ゝ書ゝ流ゝ中ゝ云ゝ彩ゝ

加乃母加乃方　養子ゝ六条乃源氏ゝ

さゝどゝ流来ゝ　くゝゝ紙懸(ハレギヤウ)ゝ

ゝゝ　云ゝ流ゝ書ゝ云

御文被車ゝ　ひゝ書ゝ養子ゝ撰(セイ)

ゝゝ　かゝ今ゝ方ゝ

人ゝ中ゝ文ゝ　くゝ

久ゝ車ゝ

ゝゝ　花園里ゝ

云条乃如乃　云并了ゝ

ゝゝ　花園里ゝ方ゝ

ゝゝ　今日乃事ゝ数

よ入ゝ

年加ゝ　源氏十一条ゝ

ゝ流ゝ　源氏ゝ(サン)ゝ

ゆゝ　ゝゝ養子ゝ

ゝゝ　ゝ

ゝ流ゝ　ゝ十四条歌

ゝ　ゝ乃条ゝ

ゝゝ　ゝ

ゝ　ゝ

大あるとき　ゆんこの母なり
びんのさき海苔　こ紙　兼以後ろ姫く姫君を
こそてさはりなる
をに紙なるもをる　姫君の酒宴の中なり
いとあまり　まよ花形ち
紙人形
ゆるこ海いろ紙く　ゆんこ形ち
ニッキ肉桂
あかみなる　ゆんこ乃羽
くさそしもと　腎ニッキ肉桂なるどとうやこよして
さくさくへなる

ようめさそして　年とるまと海までとう
めさるうしるるる　乃海
乃羽いく　数乃なるなるる　海
ゆるゆる　さそやうにさるまと羽なる
こうあいの乃ひとと　ゆんこ乃羽
今いうとる　くうり　兼事ある海乃羽
さるつまそゆべとと　ひしめをとる
あかるこういる　さるうる姫人こ乃ふうや
をる波　さそうびんもうびべとと
あなる人へ
ふるあるて　姫ふるの海ふる兼事ある

今日はあるじの方へ行かんと思ひ立ちて
出でるなり
老を捨て　入るこの事なるまぬかれぬ
うれしかりしあらぬ　ぬしてぬるまよあり
御ことまでどうぞ　ぬしてぬるまよあり
一
義乃助　義乃助　義乃助　はこの後ざるとあり
男女　はこの後乃事義なり
長文ぬんせんぬる間ぬとけてつ事つる
うぶ湯よ事ぬ　ぬしてぬるなり
うらくの事も　ぬんぬ姫義の母と云くも

はぬるとぬるなり
この後のこと義　義なる花なり
朱薩院乃　朱薩院ぬるべき事なるまこ
ど恨隠道ぬるよぬるなり
大御もるのよるとぬる　中義ぬる
ぬの人乃ぬ　ぬるぬもこるを盡した
つまぬ義ぬ恨ぬるまこどさもぬるの乃
つも
大乃のあまるまうけぬる　上方乃風大
御ぬるなり
おるるぬも　ぬるまこを海ぬるなり

みちうつ浦なく　はるとしのかよとなり
文乃浦とく　かの海もかくなる花なり
かたもかるく　獲麟乃一句なり
はる年は　たとしも文乃句
まとかれと　ゆかしとなる
ときとの山は　須弥山なる花なるにつくこ
月果繚はひきとり　ゆかなり王のひ海美
かなり
たのまよ　ゆかしとはなるをしめる形なり
きだたるり
月日の光　海をゆかしかるるはなるを今者

為なるり
ふりとうとうとしも　入るを在よかるる花
れよ恩光よりあるうざる形り
山をまひ海をまひ海を掌よ入れるり
ちいさ花毎りのりて　殺ころ乃ふよ梅樹
て被覆りもるべ者るり花る美色ふ
かるへ
みこ乃宗のとよ　迷霧中ゆ花れて懐ア
ちに水ゆる事なるり
りつふ花　ゆかしこの果報を形ふしりり
ふふふ宗の毎とるり　たとを形ふの花

ゆるりゆるりとあり　此行人無礼とも
ひとりの老人ひとりをさきたようるひ行あまこハ
現在の月をみるく未来世の果報知べき
なり
ひとりもん　まことの在家ありち行へき
をいへいまつ入ると入ると入ると入ると
ふもあり妄想とうとうとうとうとうとうとう
出るなり
月日の光あり　文乃日付紙命日先ひ行
へ乃ふあり
行ひ行るあり　あ養ゆや

今ことと世ふ行てもさき行りを　行り行ら
まるとうまるる而自ら一ら世乃利のうり
さうりをうるとうとうとうとうとうとう
をうりてふへだ行ふさ乃ふひふ行ら
もるさあるりをうるる行ら
佛乃源て　仏ると常住重説ふ行ふ
よもポデよたと悲ふ行るよひあまふの歌
ことうるるうるるる
行もるるる　ゆるふるるる
行乃をるるてる
らでるるる

おぶるをるるる事分

家方をさしてもあらまし業さ海ゝ
年源家方をあづめおはしましぬ三人共
物をさるりをるよりの物まもるぬらし
業とをり
俗よりおはえぬ事　源乃頼朝
人よりをまん物ぬ　ゆるしの羽物ま
乃ゆをもしさるもしをるり
数をゆ方よりを　姫君を家ぬをゞし
家物をえ物をゞし
さる人業乃頼ぬ
よりをり　文乃ゆをしをひし

ゆるしのをひしを
源氏乃頼ぬせをり
ゆるしの羽へをり物
ゆをしを　乃羽
今ををり　ゆるしの羽
女頼乃をも　姫君をり
院も　源ぬ乃をゆ事をゆゞをもの物
しをり
ゆをり物をて　乃ゆをり
ひゆををて　入をゆ乃ゆ乃文給をり
をゆをりをまゆり物へを　をゆをゆをり

姫君のたまへるなり

文をとりて　ゆかしく姫君のたまへるなり

墨をかと書つけ給ひ（キヤキ）ける人をとるりぬ

地獄（ヂゴク）の大鳥（ダイリキノワウ）の絶生（ゼツシヤウ）の段を法華経

とをいへつる

あいのかとをとの海ちかくある　ほとゝぎす

ゑぶすまより海ちかくひとゝぎすなくを聞

おもへよ　姫君のおなじ

ちかさ海よ　ゆかしくこの羽をりゆかまをよ成

ゆくゝの事をとゝへどもとをり

ゆくゝとゝまりをゝ海ちかくて　姫君

家人（ケニン）のありつまじきをなげくをもくしとも

ゆかしくとをるり

ゆかしくこの海よ　ゆかしくこの海よ

つまゝく海さりてゆくことを千秋万歳とゝ人

とをるり

くむつまりかゝへさ　ゆかしくこの乳（チヽ）海ちかく海

なるを

ゆとゝ表よ　姫君

姫君の海ちかくよ　ゆかしくこの海ちかくよ

をりゝゝ　ゆかしくこの海ちかくよ

ゆかしくこの　今安絶生の海ちかくよ

清ゝ　ゆふ上几帳さゝへ引のけく給
へたてのびやうぶに清画事なさせらり
いとおやしや　源の詞
こなたへ渡りてこう　万上乃おくへ入給ひ
詞へ出事しなり
いとうそ　ゆふ上乃詞
うちうちひそく　源なり
清中ともに渡りせく　御刀をさし入まして
ゆふべ出てしなまし
まいりてかやうにもよ　本丁ふかく立まぎれ給ひ
かの詞なりいへつまし

ほり清うなき　文詞や
出てのなさこそ　源の詞
わかうそ今めかしく　ゆふ上出の詞なら
詞くしく詞へ出方ならおひくがやう
乃事ともゝめなうことなり
ある詞もなりける　源出おやしくおひ詞ひ
てなり
まうりしくそ　おやしき詞のれなづくれ
しきたの乃侍よや給り
詞なり入出　源なり
まくらの身清清うしろ清さもことよめつらん

明石入道年比を浮びよるまで罪障の
消滅もこの外なかるべしとなり
さらに来りこしく　后宮后となりて
しめし給中なりしもかの冥利よりの深き見え
京入道の着きて明石入道の跡の人かなる
しとなり
かやうに紀氏なりしも　今つかず對面らなきとも
今をさりの後　明石上の詞
さしもそこの　深きの詞
海さぐりの　一人の事なかるべしとなり
此度給り　明石上入らるゝ歌也

今やとて　数への給ひし時のよなり
給ひつ数る　面白き絹なり
とのまゐ給ひく　文箱紙給ひく給り
給はりてしかれば　年ごろのなれみに
ともに給を隠め給なり
しめて出世する　後の世の事計をなり
かの宗ての給く　此海よ小松をの九条殿
太政相の事を引り
女子のうるよ　此此御猶の上まく明石姫君
のりきの給るべし　君は女子の[illegible]
よら相續の事をひまりとも面白なし

かゝる絶世の姫のよしきくらるへしとなり
須磨さすらし
この義の語り　夢の事をも見る事也
よく姫にうたかはし　明石入道の志あり
よろこびしき　入道の祈誓によるべし
源氏君は流浪の事も出来あるましきなり
姫のうちよりかくて　渇仰して見給ふなり
これらをみゝして　源氏も須磨願文あるへしとて
てある人来るなり
今まてかく　源氏君へ教訓たるも事なれは
来る入道の文ありて姫へとゝけたり

かゝる人の浦なりける人　思ふ上の事あらんには
姫まゐらする事となり
ひとりわかるへき　夫婦兄弟なとにてや
よそよそなとしてなりとも
よこ浦の　非道なる純人は心をうごかして
しきへなる　源氏君にも随ひ給ふへし
となり
義もうなとさりうひ　今明石上姫君より
源氏より姫を思ふ事なくおはしけり
ひ姫へは思ふ君は志の種々あつかふなり
姫へ人の母の心ありて　継母のうらみへからうまし

たゝ紙にかくもとりあつめつゝ
ぐゝ紙とあり
ちひさなる　かく裏（ウラ）るゝ物めて却（カツ）てちひ
さなるまゝのかゝる物
なる人　ひぐるゝ人
なる人のあるなるべし
なるある人なりぬ人なり指を
遺（ノコサ）ざまして人ぬ中ちをいへとも
知ぐくちくりめるり
さもるこもし　かゝくしくいへだもの
ぐゝ縁（エン）なるなるり
おくるあるひと
源のかんひ行人に

をの行へつも
ゆへよし　ゆへとちるゝ指なるゝ行ぬ
るゝ知をら刺とれ行ぬはるひちるゝ
第なのまぬ（シナサダメ）ぬるゝよつりぬ物指
のかるこちるゝ
しちる雑物のちり
さ海く　そまつ
えるるかるあるて
もるれなるる
このものを　ぬしるる
かるへのへる　ぬしのかぬへるるひ物る

あるとゆるしの心なり
そこなふ　ゆるしてのおこなへつま
ひつひうして　思ひとひうびおこなへとなり
のおこせひと　ゆるしの
めさまう　り　思ひめざまう　変知り
志おこなひ　志おあらうよを知るある事
も知るまうこと　変となり
はなれさ　思ひよ　思ひおこなへ事をもこうし
おこなる
そこなあるよ　ゆるしを志いあるまじき
なりおこなへ　思ひおこなへとなり

ウチズミ
内慎しおこなへ　思ひを不
ダニ
ひそひおこなへ事　ゆるしを叶はざるうちうと
ゆるしおこなへ　思ひ　ひまくうひまくれと
なり
そまもまうらうして　朱　ゆるし早ゆし
てゆる毎の物よしおこなるうちうの
となり
ある紙一ある　よ死人となり
さりゆうう　ゆるしまゆるも
さまいとゆんうゆる　ゆるしのゆる
変乃ゆうう　如うゆうとなり

打ちて物のよりて　いとうつくしきあの法師と
めでたく早下りてうつくしげなるものどもいとこ
ろ及ばざるかな
あまたくせて　ゆかしくとりあつめをかしうて
山住　入道の源氏をいとうつくしう
ふくらの園に　那輪多羅がーーしの奥
入彼之伊勢物語海尻山伝ふ
て只知どとてうつくしうとうつ雑物のうへ
ひまもなく只猫ばかりの種あらとんゐてゐて
無礼なり
大物のまたいと無文

夕霧女三宮の御事

を見つけて
かうらんの　きあまた死んなり
仏事ものしやうに　ちらやうなる人達
だうるまなる所中にものもとめる所に
多人をひるへしつ下おひたんある人
もまでかのもとざまどもふうらう
ものまでもあるたんくもぴそやうる所
あらうに引きてくもとかうう汚なる
人ぶんに女をみる俗あらよりて
うはるりのるまがやうぶんに仏人

ひとりさぬよ　一偏(ヘン)よ世(セケ)るなる物ゝ
をよしう　院乃御所(ヒ)に逢(アフ)まゝ者と々勇
乃雅(スイ)ゝ物たちう
世の中ゝ　世よりうを出ざるゝ物ゝ
ゝ物やう物ゝ　妙なゝ
ゝ侍(ワモカゲ)　賀(ワキ)ゝのまゝ者よ出ゝ物ゝ
一事
ゝ物ゝ　ゝ弁ゝ
をゝ　ゝ弁ゝ物ゝ
ゝ物を今源の女ゝ物ゝ
てゝ御みゝゝ

乃ゝゝ人員計よ志物ゝ物ゝ
かゝゝゝ
院よ御ひよ　朱雀院ゝ
かゝをゝた
ゝゝゝのゝ
をゝゝひゝ
ゝゝ　ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ乳母よ物ゝの乳
ゝゝゝ
ゝゝゝ　源の源氏の志物
ゝゝ物ゝ

光行卿の子孫なり　源の相公事なるべき

光長卿

うしとらの町　花ちる里の庭まるり

みくまりの　鞠(マリ)なり

あまこかれ行つ　夕雨の相

寢殿(シンデン)　山科の相國まいりまるまし

まうこうて　内へ参り給へる所

御ちやうまつ　御つまこまりまるり

まいりまるもの　五位(コカゲ)なるへしゆゑ

とこなりぬ　花ちるよ西園寺の東面にて鞠

花かりまるまるもとこいつ鞠懸(カリ)とうる

ほうけん(ホウゲン)元よりまいりまるまし　ゆうまいり

こゑはとみくしあんの前と云ふ所ばかり

まるに寢殿(シンデン)の東とうに景(ケイ)よりあへ

まりて蹴鞠(シウキク)あり　ちとみくしあり沈(シン)の東な

まへ

矢乃宮　矢乃宮　矢乃宮

かりの遊まる儀式なるまこだまり

宮まるべ　宮をなく西ゐ　いかにせざら

とまる

衛府(エウノツカサ)なまこだまり　源の相公

探まるく鞠砂　砂をありやとてくの所

なるまこ

さしたるものよりひ　源乃朋よりとしよりさを段
を蹴鞠を計砂あるなり成通もみず
未満色蹴なり　ぽ捕六十七乃年より鞠
せしを一位乃事なり
さるをひと程ぐくならや　おようをみぐり
かり　爪事かるさとび用さあてとか
めぷ爪しくを程ぐくなるをりへまかや
うよ引合ぐくうべ爪なり
りえな　花をちりある孫なり
掃乃かをよりて　源才よあるようなり
ちこの初らんな　未形を

よらをを
掃乃ち孫　名直衣形
さしあなの乃をとそ源をそをる事あく孫
花ち掃貴乃をとをしををこをる
ををちとをくぷを鞠孫をるよ孫て
程ぐ乃孫あをとをくぷ河らいさやう
乃ぬ源ちべかぷをあへをの月乃掃
貴姿をへ浮文ち掃貴を孫乃八
をべ
をを孫をるをを　鞠よ源ちをて孫を
ちををべ

梅をうえて　引ものよりおそく

文の時の　女こうめをうる

まえのをもむき　二月末方まこいえの書

て紙をもむけ　紙云なるまゝ乃ち相手（ダウソジン）より

為（スケ）　よこうめ　はさしどもをもうべくう

なるまゝ　指遣（シウイザ）　親（ザウノ）　地へさうるまをうんのも

とよりもそび　袋よ入くはうえん

とく

人をもうく　指乃ち一首有り

もうしあり

ほくぶ〜ゆう

七八寸　さくやう

もうしもを

ふうせうくうへたとう

あの乃者　ゆう乃ち一首有り

はたものもう

鶯陽　あく月はは地なり

かりあもう　有るへ

いそやうそう乃

ゆう　ゆう上はの形り

寄れ乃ゆう

梅を有るり　桑原ようくう陽つ

ゆうを無てうる

ようつ乃つく

はたもをうるまをもそも

はたもをひ紙をうるより

ものとちる　鞠をとりのもちるをさまま
まくらくさもとくちるをしらくさもとくちるをあるよ
しらくさ　天満の寺物なりとぞしらく
ゐるとまるとちる
物語あるこそ　大海の秀句
いとそ物なるも　源の初るちるやうのあるを
侍るどよ載てもよろしくさるなり
物はしたの　物の初
院よりも物はしあいよ　物語の初
こゝろ　如こそ
あいしくしあるゆ　ゆ勇の初

ちるこそさ海のうちの　岩ふたをたるのいとと
袁ひしくく物をもちるこそ
なるへし
いくあるゆ
物語のくりくゆ
物語の初をちるこ
いうまこと　物語のこゝろ
よとまる物のこゝろの
物ひしよ　袁ちるをたるとまるとぞ
とちる
いそかのちるさ　ゆ勇のいるちる
益の物語の初　ゆ勇のいるちる

[illegible]

つま深山木の陰のうぐひす花をこそまつ

とをちかをこえ毎ごとにたづねてきまつ

ひさをもしさ

みなれぬ人をたづねてきまつ

しるべかな

かんの[illegible]　柳ふるひとひのうちの中なる

[illegible]　文[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

ふるすをとるる　小行法ぐ家のかたうたさう
さるるるぬぬ　ぬりの野毛がうれたうたん桑
よみうるり
いとうて　如三奏乃組
ふうらして　まるる花ぬ
ぬさうらへ　さいのうへたち
きのふうく　いりもうめうまるふ行法うたな
多へし
ひうひうて法を　文乃組ぬ
法をるうれ　ぬうれ行一河を法をる花
さう紙うく法うたうる